

同性愛開示が友人関係に及ぼす影響

—大学生・大学院生を対象に—

How Does Coming out Effect on Friendships for University Students?

葛西真記子, 水谷 健太

KASAI Makiko and MIZUTANI Kenta

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

同性愛開示が友人関係に及ぼす影響

—大学生・大学院生を対象に—

How Does Coming out Effect on Friendships for University Students?

葛西真記子*, 水谷 健太**

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学 人間教育専攻

**〒116-8567 東京都荒川区西尾久2-1-101 東京女子医科大学 東医療センター

KASAI Makiko* and MIZUTANI Kenta**

*Naruto University of Education, Human Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

** Tokyo Women's Medical University Medical Center East

2-1-10, Nishiohisa, Arakawa-ku, Tokyo, 116-8567, Japan

抄録：これまでの先行研究では、女性よりも男性の方が同性愛について好ましく思っていないことや、男女ともに、社会が期待する性役割観と合致する者は、そうでない者に比べ同性愛に対して好ましくない態度をもっていることが明らかにされている（桐原・坂西，2003；和田，1996，2008）。本研究では大学（院）生を対象として、実際の同性もしくは異性友人から同性愛開示されたことを想定した際の友人関係の変化について、性役割態度要因も含めて調査した。その結果、異性愛男性は、友人から同性愛開示されても友人関係を続けたいという気持ちに変化はないが、いざ友人と行動を共にするとなると躊躇したり、お互いの内面や価値観について話すことを避けようとしたりすることが明らかとなった。異性愛女性とマイノリティ女性の場合、カミング・アウトされた経験の有無に関わらず、友人と交わす行動を減らすことはなかった。

キーワード：同性愛開示，性役割態度，カミング・アウト，友人関係

Abstract： Previous studies have shown that men are less favorable toward homosexuality than women, and that both men and women who conform to society's expected view of gender roles have less favorable attitudes toward homosexuality than those who do not (Kirihara and Sakanishi, 2003; Wada, 1996, 2008). In this study, we investigated the changes in friendships among university (graduate) students when they experienced coming-out of homosexuality by their actual same-sex or different sex friends, including sex-role attitude scales. The results showed that heterosexual men did not change their desire to continue their friendships even after their friends came out, but they hesitated to go out with their friends and tried to avoid talking about each other's inner life and values. Heterosexual and minority women did not reduce their behavior with friends, regardless of whether they had been come out or not.

Keywords： Coming-out, Gender role, Homosexuality, Friendship

I. 問題の背景と目的

1. 問題の背景

現代社会において、セクシュアル・マイノリティという言葉は広く浸透したように思われる。しかしながら、セクシュアル・マイノリティ当事者の中には、社会や周囲の人の差別・偏見によって、いじめ、拒絶、希死念慮などの様々な困難を抱えて生きている人たちがいる。

本研究においては、セクシュアル・マイノリティの中の同性愛者に焦点を当てることとする。同性愛者は、異

性愛を前提とした社会や人々の意識によって、多くの困難に直面することがこれまでの研究で示されてきた（e.g., 山本・大蔵・重本，2012）。同性愛者が抱える困難の一つとして、自身が同性愛者であることを伝える行為であるカミング・アウトが挙げられる。同性愛者にとって、他者に本当の自分を理解してもらったり、恋愛感情を伝えたりするためにはカミング・アウトが必要となるが、それによって拒絶や批難にさらされることが多いと言われている。本研究では友人関係における同性愛者のカミング・アウトに着目し、特に友人の性別によってカ

ミング・アウトが友人関係に及ぼす影響に違いがあるのかについて検討することとした。

2. 同性愛者のストレス状況

性や性別に関する事柄は、人にとって非常に重要で基本的なものであり、性や性別について精神的に安定していて、充足感を持っていることは、高いQOL（生活の質）にとって不可欠である（石丸, 2009）。しかし、石丸（2004）も述べているように、若者の自殺のうち同性愛者・両性愛者が占める割合は少なくないと言われるほど、そこには特殊なストレス状況があることが多い。Hidaka & Operario（2006）が、ゲイ・バイセクシュアルの男性の自殺未遂経験率は15.1%であり、いじめや嫌がらせの経験や、高い不安を持つ者が多いことを明らかにしている。恋愛や性行為は非常にプライベートな話題なので、日常生活場面においては、カミング・アウトをせずに過ごしている人々も多い（石丸, 2009）。職場・学校や家庭などの生活場面において、無理に同性愛者を装って精神的に疲労したり、（相手が当事者だとわからないため）面と向かっての否定的発言などにさらされ、マジョリティにはないストレスを持つことがある（石丸, 2009; 梶谷・横山, 2007）。同性愛者を装うことでストレスを強く感じているゲイ・バイセクシュアル男性ほど、抑うつ、不安、孤独感などが高く、自尊心（self-esteem）が低いことが示されている（日高, 2000）。

3. カミング・アウトとその意義

見えないスティグマを持つマイノリティである同（両）性愛者の多くは、“カミング・アウト”という問題を抱えることになる（石丸, 2004）。セクシュアル・マイノリティは、自認する性指向（同性愛等）を公にする（カミング・アウト）か否かの選択を迫られる（桐原・坂西, 2003a）場合が多い。性指向がマイノリティである者は、自分からセクシュアル・マイノリティであることを表明しなければ、性的魅力を感じ、恋愛感情を抱いていることを相手に伝えることができない（桐原・坂西, 2003a）。女性同性愛者に聞き取り調査を行った梶谷（2008）も、女性同性愛者たちにとって性指向を開示して他者に受け入れられることは、自分への理解や共感が深まることだと考えており、反対に開示しないで生きていくことには、他者とわかり合えないことや心理的な距離の遠さを感じると述べている。カミング・アウトする側は、自分のことを知って欲しくて、理解してもらいたくてカミング・アウトする（桐原・坂西, 2003a）のである。

しかし、同性愛者が自身の性指向を明らかにすることによって受けるであろう社会的不利益は依然として存在する（和田, 2010）。「同性愛は社会から排除されるべきだ」「同性愛者とは関わりあいたくない」といった拒否

的な態度を持った同性愛者が未だ数多く存在する（石丸, 2008）。つまり、カミング・アウトは、社会的な拒絶と排斥を生むおそれがあるのである（桐原・坂西, 2003a）。上野（2008）も、自らを偽らずにすむ他者との関係性を求めても、それを得るのはかなり困難であるとしている。故に、対人関係が広がりやすく、深まりにくい傾向がある（梶谷・横山, 2007）。カミング・アウトしないと決めた者でも、適応がよいように見える場合でも、他者との相互理解が成立していないことで孤独感を感じている場合があり、そういった開示／非開示の葛藤を常に抱えていることは、同性愛者にとってストレスとなるだろう（梶谷・横山, 2007）。自分のセクシュアリティについて家族や友人など重要な他者から受け容れられるかどうかということは、同（両）性愛者にとってとりわけ大きな意味を持つてくると思われる。

4. カミング・アウトの相手とその反応

セクシュアル・マイノリティの研究において、同性愛者のカミング・アウト（同性愛開示）に関する研究は多く行われている。梶谷・横山（2007）は、友達に対して最も開示しやすく、家族や職場では開示しにくい傾向がみられたとしている。桐原・坂西（2003a）は、実に92%の同性愛者が友人にはカミング・アウトしていると報告している。

同性愛に対する態度を調べた和田（1996）は、女性よりも男性の方が同性愛について好ましく思っていないことや、男性は男性同性愛者に、女性は女性同性愛者により個人的不安を感じ、男性は男性同性愛者よりも女性同性愛者を、女性は女性同性愛者よりも男性同性愛者を好んでいたことを明らかにした。しかし、これらの研究は同性愛者全般に対するイメージを尋ねており、実際に親しい身近な人からカミング・アウトされたときのイメージを聞いているわけではなかった。さらに桐原・坂西（2003b）の研究では、男性はセクシュアル・マイノリティ、とりわけ「ホモセクシュアル」や「バイセクシュアル」に対して消極的ないしは否定的なイメージを抱いていた。男性より女性の方がセクシュアル・マイノリティに対して受容的であった。また、伝統的志向の弱い人（つまり旧来の性役割に拘束されない人）の方が、伝統志向の強い人よりもセクシュアル・マイノリティに寛容であり、カミング・アウトにそれほど否定的な反応は示さなかった。さらに、女性の方が「ホモセクシュアル（ゲイ）」に対するイメージが「レズビアン」に対するイメージよりも否定的だったことを考え合わせると、女性では、「同性の友人からのカミング・アウト」よりも「異性の友人からのカミング・アウト」に対する反応の方が否定的ということも考えられる。

同性友人から同性愛開示された際、被開示者が恋愛対

象となるか否かによる異性愛者の行動の違いを検討した和田(2010)は、開示前よりも開示後の方が親友と伴にしたい行動を減少させる傾向にあることを見出している。これは男女に共通して見られた結果である。また、和田(2010)は同性愛者であることを開示された場合と、同性愛者であり、かつ開示する相手である親友も恋愛対象となると開示された場合の反応についても比較検討している。その結果、男性は同性愛者と分かるだけで、親友であっても開示内容に関わらず交わす行動を減らしたいと考えることが示唆された。一方、女性は男性よりも同性愛一般に受容的であるので、自分が恋愛対象となっている時には(親友であって恋愛感情とは異なるので)親友と交わりたい行動をより減らすのが、恋愛対象となっていない時は交わりたい行動を減らすものの、減らし方が小さくなることが示唆された。同性愛をめぐる偏見には性差が存在し、一般的には男性の方が女性よりも同性愛者に対して否定的な態度を示すのである。

これまでの研究の多くは性指向の開示を想定せず、単に同性愛(者)などのセクシュアル・マイノリティへの異性愛者の態度やイメージを調べた研究も多い。一般的に男性よりも女性の方が同性愛に受容的であること、また男女とも伝統的な性役割に合致しているものの方が同性愛者を好ましく思っていないことが明らかにされている(山本・大蔵・重本, 2012)。また、男女ともに、社会がそれぞれの性に期待する性役割観と合致する者は、そうでない者に比べ同性愛に対して好ましくない態度をもっていることなどを明らかにしている(和田, 2008)。

5. 性役割態度

男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動(東・鈴木, 1991)を性役割、性役割に対して一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向(東・鈴木, 1991)を性役割態度という。同性であれば、異性であれば、性役割観が形成されている人にとっては、同性愛はステレオタイプ化された異性間の恋愛関係、愛情関係からは逸脱したもの(桐原・坂西, 2003b)となるのである。このように、同性愛者に対する否定的な反応の要因として、性役割態度の高さが挙げられている。

性役割態度は男性性と女性性で構成されている。性役割態度において、男性性はM、女性性はFで表される。Bem Sex Role Inventory (BSRI; Bem, 1974)は性役割パーソナリティを測定する尺度であり、男性性尺度得点と女性性尺度得点の組み合わせによって、個人をアンドロジニー(男性性・女性性がともに高い男女)、セックスタイプ型(男性性が高い男性・女性性が高い女性)、クロスセックスタイプ型(女性性が高い男性・男性性が高い女性)、未分化型(男性性・女性性がともに低い男女)

の4種類に分類する。社会が男女に期待するそれぞれの性格特性のうち、男性的特徴と女性的特徴の両方を持つのをMF、いずれか一方のみを持つのをMf、mFであり、いずれももたない者をmfと表すことがある(鹿内・後藤・若林, 1982)。MFタイプが男らしさと女らしさを状況によって使い分ける高度な行動の柔軟性を有する(鹿内・後藤・若林, 1982)とされている。また、アンドロジニーは他の性役割タイプよりもLGBTに対して肯定的で積極的な態度を持っている(Kasai & Kawakami, 2017)とされている。

同性愛者におけるカミング・アウトに対して、異性愛者がどのような反応を示すのかに関する研究では、男女ともに、自分の性別と一致する性役割態度を高く持つ者ほど、同性の同性愛者に対して否定的な反応を示すことが明らかにされてきた。しかしながら、性役割態度の4つのタイプを考慮したカミング・アウトに関する研究はされていないようである。男性性の高さおよび女性性の高さが同性愛者に対する態度に影響を及ぼすことがわかっているのであれば、性役割態度の4つのタイプに細分化して検討することで、より同性愛者への態度に及ぼす性役割態度の様相について理解することが可能となる。

6. 目的

これまでの同性愛の研究においては、一般的なカミング・アウトに関する研究が多かった。そこで本研究では、実際の同性あるいは異性友人からカミング・アウトされた際の友人関係の変化を検討する。異性愛者に同性・異性友人から同性愛者であるとカミング・アウトされたことを想定してもらい、カミング・アウトの前後で友人関係にどのような変化が生じるのかを検討することを目的とした。

また、これまでの同性愛研究においては性役割タイプとの関連を検討している研究は見られないため、性役割態度を構成している男性性および女性性の組み合わせによる性役割タイプの要因も含めて男女別にカミング・アウト前後の友人関係の変化を検討する。男女別に分析を行うのは、友人との親密度や友人関係の在り方、セクシュアル・マイノリティに対する態度などが男女で異なることが明らかにされているからである。また、桐原・坂西(2003b)の研究には、協力者に両性愛者や女性同性愛者を含んでいるという課題もあった。したがって本研究では異性愛者のみを分析の対象とした。

II. 方法と対象

1. 方法

1) 質問項目と項目の妥当性と信頼性

本研究において、友人関係を測定するために用いた尺度は、榎本（2003）の友人との活動尺度、友人に対する感情尺度、友人への欲求尺度である。「友人との活動」(29項目)とは、友人とどのような活動を行っているのかという側面、「友人への感情」(25項目)とは、友人に対してどのような感情を抱いているのかという側面、「友人への欲求」(15項目)とは、友人に対して何を求めているのかという側面である（植村，2007）。

性役割態度を測定するために用いた尺度は、東（1990；1991）の Bem Sex Role Inventory (BSRI) 日本語版である（60項目）。これは性役割パーソナリティを測定する尺度であり、男性性尺度得点と女性性尺度得点の組合せによって4類型に分類する（植村，2007）。

これらの尺度を合わせると、全129項目に上り、調査協力者への負担が大きくなることが予想された。そこで、臨床心理学を専門とする者、臨床心理学を学ぶ大学院生（現職教員含む）7名との協議によって各尺度を検討した。その結果、友人との活動尺度は12項目を使用することとした。友人に対する感情尺度は11項目、友人への欲求尺度は5項目を使用することとした。次に、東（1990；1991）の BSRI 日本語版尺度を検討し、男性性因子は10項目、女性性因子は10項目とした。

友人との活動尺度は各項目に対して、その活動を友人とどの程度するのかを“とてもよくする－まったくしない”の6件法で回答してもらった。友人に対する感情尺度は、その感情や欲求をどの程度抱くかを“とてもよく思う－まったく思わない”の6件法で回答してもらった。性役割態度尺度は、それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを“とてもあてはまる－全くあてはまらない”の7件法で回答してもらった。

このように項目数を減らしたものの妥当性と信頼性を確認するために予備調査を大学生および大学院生計127名に実施した。

予備調査の結果、各下位尺度の内的整合性は、友人への欲求尺度の「相互尊重欲求因子」($\alpha = .44$)以外は、 $\alpha = .75$ から.89となり、ある程度の信頼性が確認された。「相互尊重欲求因子」のみ内的整合性の値が低いので、本調査には含めないこととした。

2) 質問紙の構成

予備調査の結果に基づき、本調査用の質問紙を作成した。本調査用の質問紙の構成は以下の通りである。なお、質問紙は実際の同性友人からカミング・アウトされることを想定するもの（以下、同性版）と、実際の異性友人からカミング・アウトされることを想定するもの（以下、

異性版）の2種類がある。

①フェイスシート：年齢、性別、所属、学年をたずねた。男性や女性以外の性別についても回答できるように（ ）の中に記述してもらった形をとった。

②友人のイニシャル：同性版では最も親しい実際の同性友人（以下、友人）を、異性版では恋愛感情を抱いていない最も親しい実際の異性友人（以下、友人）を1人思い浮かべてもらい、その友人を明確にイメージしてもらうためにイニシャルを記入してもらった。

③友人関係1：予備調査で作成した友人との活動尺度、友人に対する感情尺度、友人への欲求尺度を用い、友人との付き合い方について調べた。回答方法は予備調査と同じ6件法で回答してもらった。

④性役割態度：予備調査で作成した性役割態度尺度を用いた。男性性9項目、女性性10項目であった。それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを“とてもあてはまる－全くあてはまらない”の7件法で回答してもらった。

⑤同性愛開示：同性版および異性版ともに、同性愛開示のページには“あなたがQ1.（質問紙の構成②）で思い浮かべた友人は同性愛者です。友人は、あなたに、同性愛者であることを打ち明けました。次からは、このことを踏まえてお答えください。”と記載した。

⑥友人関係2：改めて、③の友人関係に関する尺度を用い、友人との付き合い方について回答してもらった。なお、③友人関係1とは項目の並びを変えた。

⑦回答者の性指向：倫理的問題に配慮し、この段階でもう一度、“得られたデータは統計的に処理し、個人個人のデータを明らかにすることはありません”という文章をつけ、自分の性指向について“異性、同性、両性、どれにもあてはまらない”のいずれであるかの回答を求めた。

⑧カミング・アウトされた経験の有無：同性・異性問わず、これまでに友人から同性愛者であることをカミング・アウトされた経験があるかどうかについて、“ある”“ない”のいずれであるかの回答を求めた。

3) 調査時期と倫理的配慮

2018年7月中旬から10月上旬にかけて実施した。大学生に対しては、講義の時間を利用して質問紙を一斉に配布し、その場で回収する方法で回答してもらった。

協力者には研究協力が強制ではないことを伝え、自由意志で参加してもらった。また、取得したデータは研究以外には使用せず、調査内容が外部に漏れることはないということを伝え、協力者に対し調査の十分な説明を行った上で同意を得るなどの配慮を行った。質問紙を配布・回収する際には、1部ずつ封筒に入れて回収した。

2. 研究協力者

A 大学, B 大学, C 大学の 3 つの大学で調査を実施し, 各大学に通う大学生および大学院生である計 430 名から回答が得られた。その中から無効回答を除いたところ, 計 401 名となった (有効回答率 93%)。同性愛友人に対する異性愛者の活動, 感情, 欲求を調べる上で, まずは本人が異性愛者でない回答者と, 既に友人から異性愛者ではないと開示されたことのある回答者を除外するために, 回答者の性指向が異性であり, かつ友人からカミング・アウトされた経験がないと回答した者のみを対象とした。同性愛友人に対する異性愛者の友人関係を調べる際の対象となったのは, 男性 161 名 (同性友人群 80 名, 異性友人群 81 名, 平均年齢 19.45 歳, SD = ±1.60), 女性 155 名 (同性友人群 73 名, 異性友人群 82 名, 平均年齢 19.62 歳, SD = ±1.29), 計 316 名であった。

研究協力者が異性愛者ではない場合や, すでに被開示経験のある者に関する結果については, 紙面の都合上本論では報告しないこととした。

III. 結果

1. 尺度の信頼性

共有活動下位尺度, 相互理解活動下位尺度, 信頼・安定感情下位尺度, 不安・懸念感情下位尺度, 親和欲求下位尺度, 男性性下位尺度, 女性性下位尺度のそれぞれを

対象に Cronbach α 係数を算出し, 内部一貫性の検証を行った。それぞれ順に $\alpha = .85, .87, .92, .80, .80, .87, .90$ となり十分な信頼性が確認された。

2. 性役割タイプに関する分類

性役割態度要因についても検討するために, 回答者の持つ性役割態度に関して, 先述した 4 つの性役割タイプに分類した。分類方法は, 男女ともに男性性尺度及び女性性尺度のサンプルの中央値を基準として, 男性性及び女性性の高さを判断し, その組み合わせによって対象者を 4 つの性役割タイプに分類した。カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性では, アンドロジニー 43 名, セックスタイプ型 29 名, クロスセックスタイプ型 31 名, 未分化型 58 名であった。異性愛女性では, アンドロジニー 42 名, セックスタイプ型 35 名, クロスセックスタイプ型 25 名, 未分化型 53 名であった。

3. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人との活動

友人からカミング・アウトされた経験を持たない異性愛者にとって, 同性愛開示は友人関係にどのような影響を及ぼすのかについて, 性役割態度要因も含めて調べるために, 男女別に同性愛開示 (開示前・開示後) × 友人の性別 (同性・異性) × 性役割タイプ (アンドロジニー・セックスタイプ型・クロスセックスタイプ型・未分化型)

Table 1. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人との活動の平均値 (SD)

	同性愛開示	同性友人群		異性友人群		全体	
		前	後	前	後	前	後
共有活動	アンドロジニー	4.60 (1.16)	4.53 (1.04)	4.23 (1.12)	4.29 (1.23)	4.43 (1.15)	4.42 (1.13)
	セックスタイプ型	4.40 (1.02)	3.94 (1.43)	4.02 (1.22)	3.58 (1.31)	4.23 (1.11)	3.78 (1.36)
	クロスセックスタイプ型	4.57 (1.12)	4.28 (1.37)	3.84 (1.06)	3.62 (.99)	4.15 (1.13)	3.90 (1.19)
	未分化型	4.22 (.93)	4.01 (.86)	3.45 (1.13)	3.55 (1.23)	3.82 (1.10)	3.77 (1.08)
	全体	4.42 (1.04)	4.19 (1.13)	3.82 (1.15)	3.75 (1.21)	4.12 (1.13)	3.97 (1.19)
相互理解活動	アンドロジニー	4.83 (.67)	4.83 (.85)	4.64 (.83)	4.69 (1.06)	4.74 (.74)	4.76 (.95)
	セックスタイプ型	4.28 (1.12)	4.09 (1.57)	4.08 (1.06)	4.12 (1.18)	4.19 (1.08)	4.10 (1.38)
	クロスセックスタイプ型	4.19 (1.31)	4.35 (1.32)	4.07 (1.07)	3.88 (1.20)	4.12 (1.16)	4.07 (1.25)
	未分化型	3.81 (1.08)	3.68 (1.01)	3.73 (1.09)	3.72 (1.15)	3.77 (1.08)	3.70 (1.08)
	全体	4.26 (1.09)	4.20 (1.23)	4.08 (1.06)	4.06 (1.89)	4.17 (1.08)	4.13 (1.21)

Table 2. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人との活動の分散分析

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
共有活動	開示	2.72	1	2.72	8.89	.00**
	開示 × 性別	.33	1	.33	1.09	.30
	開示 × 性役割タイプ	2.12	3	.71	2.31	.08
	開示 × 性別 × 性役割タイプ	.25	3	.08	.27	.84
	誤差	46.86	153	.31		
	全体	52.28	161			
相互理解活動	開示	.09	1	.09	.33	.57
	開示 × 性別	.00	1	.00	.01	.91
	開示 × 性役割タイプ	.14	3	.05	.17	.91
	開示 × 性別 × 性役割タイプ	.75	3	.25	.89	.45
	誤差	42.88	153	.28		
	全体	43.86	161			

** p < .01

の3要因分散分析を行った。同性愛開示前後は被験者内要因である。異性愛男性における共有活動得点及び相互理解活動得点の平均値と標準偏差、分散分析の結果をTable 1, 2に示した。

共有活動においては、開示の主効果が有意であった ($F(1, 153) = 8.893, p < .01$)。また、開示と性役割タイプの交互作用は有意ではなかったものの、やや有意な傾向にあった ($F(3, 153) = 2.306, p = .079$)。これらは、友人の性別や性役割タイプに関わらず、同性愛開示前よりも同性愛開示後に友人との共有活動が減少するが、特に性役割タイプによって同性愛開示前後での差の大きさが異なっていることを表している。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、セックスタイプ型における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 153) = 9.51, p < .01$)。また、クロスセックスタイプ型における開示要因の単純主効果が有意な傾向にあった ($F(1, 153) = 3.20, p = .075$)。これらは、特にセックスタイプ型及びクロスセックスタイプ型の男性は同性愛開示前よりも同性愛開示後に友人との共有活動を減少させる傾向にあることを表している。相互理解活動得点においては、有意差は見られなかった。

4. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人に対する感情

友人に対する感情尺度の信頼・安定感情得点及び不安・懸念感情得点の平均値と標準偏差、分散分析の結果は以下の通りであった (Table 3, 4)。

信頼・安定感情においては、開示の主効果が有意であった ($F(1, 153) = 4.028, p < .05$)。また、開示と友人の性別の交互作用も有意であった ($F(1, 153) = 4.057, p < .05$)。これらは、友人の性別や性役割タイプに関わらず同性愛開示前よりも同性愛開示後に信頼・安定感情は低下するが、特に友人の性別によって同性愛開示前後での差の大きさが異なっていることを表している。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、同性友人群における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 153) = 7.60, p < .01$)。これは、同性愛開示前よりも同性愛開示後に、特に同性友人に対する信頼・安定感情が低下することを表している。

不安・懸念感情においては、開示の主効果が有意であった ($F(1, 153) = 19.765, p < .001$)。また、開示と性役割タイプの交互作用も有意であった ($F(3, 153) = 4.219, p < .01$)。これらは、友人の性別や性役割タイプに関わらず同性愛開示前よりも同性愛開示後に不安・懸念感情は増大するが、特に性役割タイプによって同性愛開示前後での差の大きさが異なっていることを表している。交

Table 3. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人に対する感情の平均値 (SD)

	同性愛開示	同性友人群		異性友人群		全体	
		前	後	前	後	前	後
信頼・安定感情	アンドロジニー	4.85 (.57)	4.72 (.65)	4.32 (.96)	4.34 (1.08)	4.60 (.81)	4.54 (.88)
	セックスタイプ型	4.30 (.94)	3.95 (1.29)	3.50 (.95)	3.66 (1.14)	3.94 (1.01)	3.82 (1.21)
	クロスセックスタイプ型	4.68 (.82)	4.44 (.87)	3.81 (.76)	3.76 (.71)	4.18 (.89)	4.04 (.84)
	未分化型	4.09 (.81)	3.91 (.68)	3.54 (.95)	3.41 (1.11)	3.80 (.92)	3.65 (.96)
	全体	4.45 (.83)	4.24 (.92)	3.79 (.96)	3.76 (1.07)	4.11 (.95)	4.00 (1.02)
不安・懸念感情	アンドロジニー	3.22 (1.26)	3.93 (1.28)	3.25 (1.43)	3.48 (1.51)	3.23 (1.33)	3.72 (1.39)
	セックスタイプ型	2.52 (1.14)	3.08 (1.27)	3.00 (1.23)	3.97 (1.19)	2.74 (1.19)	3.48 (1.30)
	クロスセックスタイプ型	2.59 (1.41)	3.33 (1.40)	3.19 (1.12)	3.11 (1.14)	2.94 (1.26)	3.20 (1.24)
	未分化型	3.10 (1.24)	3.08 (1.08)	3.04 (1.21)	2.99 (1.28)	3.07 (1.21)	3.03 (1.18)
	全体	2.93 (1.27)	3.37 (1.26)	3.12 (1.23)	3.30 (1.32)	3.03 (1.25)	3.33 (1.29)

Table 4. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛男性における友人に対する感情の分散分析

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
信頼・安定感情	開示	.93	1	.93	4.03	.05*
	開示×性別	.94	1	.94	4.06	.05*
	開示×性役割タイプ	.15	3	.05	.22	.89
	開示×性別×性役割タイプ	.52	3	.17	.75	.53
	誤差	35.28	153	.23		
	全体	37.82	161			
不安・懸念感情	開示	10.94	1	10.94	19.77	.00***
	開示×性別	.99	1	.99	1.79	.18
	開示×性役割タイプ	7.00	3	2.33	4.22	.01**
	開示×性別×性役割タイプ	3.36	3	1.12	2.02	.11
	誤差	84.65	153	.55		
	全体	106.94	161			

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

相互作用についての単純主効果検定を行ったところ、アンドロジニーにおける開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 153) = 9.27, p < .01$)。また、セックスタイプ型における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 153) = 14.63, p < .001$)。これらは、特にアンドロジニー及びセックスタイプ型の男性は同性愛開示前よりも同性愛開示後に友人に対する不安・懸念感情が増大することを表している。親和欲求得点において有意差は見られなかった。

5. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人との活動

カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における共有活動得点及び相互理解活動得点の平均値と標準偏差、分散分析の結果は以下の通りであった (Table 5, 6)。

共有活動においては、開示と性別の交互作用は有意ではなかったものの、やや有意な傾向にあった ($F(1, 147) = 2.886, p = .091$)。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、異性友人群における開示要因の単純主効果が有意な傾向にあった ($F(1, 147) = 3.21, p = .075$)。これは、同性愛開示前よりも同性愛開示後に異性友人との共有活動が増加する傾向にあることを表している。

開示と性役割タイプの交互作用についても有意ではな

かったものの、有意な傾向にあった ($F(3, 147) = 2.503, p = .062$)。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、未分化型における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 147) = 5.12, p < .05$)。これは、未分化型の女性は同性愛開示前よりも同性愛開示後に友人との共有活動が増加する傾向にあることを表している。

相互理解活動においては、開示と友人の性別と性役割タイプの2次の交互作用が有意であった ($F(1, 147) = 3.018, p < .05$)。友人の性別要因の各水準における開示と性役割タイプの単純交互作用検定をおこなったところ、異性友人群における開示と性役割タイプの交互作用が有意ではなかったものの、有意な傾向にあった ($F(3, 147) = 2.24, p = .086$)。友人の性別要因と性役割タイプ要因の各水準の組合せにおける開示要因の単純・単純主効果検定を行ったところ、同性友人群におけるセックスタイプ型での開示要因の単純・単純主効果が有意であった ($F(1, 147) = 5.33, p < .05$)。これは、同性友人に対してセックスタイプ型の女性は、同性愛開示前よりも同性愛開示後に相互理解活動が減少する傾向にあることを表している。また、異性友人群における未分化型での開示要因の単純・単純主効果が有意であった ($F(1, 147) = 7.98, p < .01$)。これは、異性友人に対して未分化型の女性は、同性愛開示前よりも同性愛開示後に相互理解活動が増加する傾向にあることを表している。

Table 5. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人との活動の平均値 (SD)

	同性愛開示	同性友人群		異性友人群		全体	
		前	後	前	後	前	後
共有活動	アンドロジニー	5.25 (.54)	5.01 (.71)	4.24 (1.14)	4.20 (1.15)	4.74 (1.02)	4.61 (1.03)
	セックスタイプ型	4.81 (.79)	4.35 (1.04)	3.76 (1.27)	3.80 (1.11)	4.24 (1.19)	4.05 (1.10)
	クロスセックスタイプ型	4.73 (.88)	4.92 (.84)	3.66 (1.27)	3.68 (1.08)	4.30 (1.16)	4.42 (1.11)
	未分化型	4.37 (1.27)	4.39 (1.34)	3.53 (1.06)	3.93 (.84)	3.86 (1.21)	4.11 (1.08)
	全体	4.80 (.96)	4.67 (1.05)	3.78 (1.17)	3.94 (1.02)	4.26 (1.19)	4.28 (1.09)
相互理解活動	アンドロジニー	5.40 (.57)	5.36 (.71)	5.10 (.72)	4.71 (1.19)	5.25 (.66)	5.04 (1.02)
	セックスタイプ型	4.98 (.66)	4.70 (.89)	4.37 (.94)	4.55 (.85)	4.65 (.87)	4.62 (.86)
	クロスセックスタイプ型	5.33 (.61)	5.42 (.52)	4.40 (.98)	4.05 (1.22)	4.96 (.89)	4.87 (1.09)
	未分化型	4.61 (1.16)	4.44 (1.31)	4.18 (.97)	4.30 (.94)	4.35 (1.06)	4.36 (1.09)
	全体	5.07 (.86)	4.96 (1.01)	4.48 (.97)	4.44 (1.03)	4.76 (.96)	4.68 (1.05)

Table 6. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人との活動の分散分析

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
共有活動	開示	.01	1	.01	.02	.90
	開示×性別	.93	1	.93	2.89	.09
	開示×性役割タイプ	2.41	3	.80	2.50	.06
	開示×性別×性役割タイプ	.92	3	.31	.95	.42
	誤差	47.17	147	.32		
	全体	51.44	155			
相互理解活動	開示	.76	1	.76	2.67	.11
	開示×性別	9.98	1	9.98	.00	.99
	開示×性役割タイプ	.49	3	.16	.57	.63
	開示×性別×性役割タイプ	2.59	3	.86	3.02	.03*
	誤差	42.07	147	.29		
	全体	55.89	155			

* $p < .05$

6. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人に対する感情

信頼・安定感情得点及び不安・懸念感情得点の平均値と標準偏差、分散分析の結果は以下の通りであった。

信頼・安定感情においては、開示の主効果が有意ではなかったものの、やや有意な傾向にあった ($F(1, 147) = 3.286, p = .072$)。これは、友人の性別や性役割タイプに関わらず、同性愛開示前よりも同性開示後に信頼・安定感情が低下することを表している (Table 7, 8)。

不安・懸念感情においては、開示の主効果が有意であった ($F(1, 147) = 8.576, p < .01$)。また、開示と友人の性別の交互作用は有意ではなかったものの、有意な傾向にあった ($F(1, 147) = 3.085, p = .081$)。これらは、友人の性別や性役割タイプに関わらず同性愛開示前よりも同性愛開示後に不安・懸念感情は増大するが、特に友人の性別によって同性愛開示前後での差の大きさが異なる傾向にあることを表している。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、同性友人群における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 147) = 11.30, p < .01$)。これは、同性愛開示前よりも同性愛開示後に、特に同性友人に対する不安・懸念感情が増大する傾向にあることを表している。

7. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人への欲求

親和欲求得点の平均値と標準偏差、分散分析の結果は Table 9, 10 の通りであった。

親和欲求においては、開示と性役割タイプの交互作用が有意ではなかったものの、やや有意な傾向にあった ($F(3, 147) = 2.154, p = .096$)。交互作用についての単純主効果検定を行ったところ、未分化型における開示要因の単純主効果が有意であった ($F(1, 147) = 6.45, p < .05$)。これは、未分化型の女性は同性愛開示前よりも同性開示後に親和欲求が増大する傾向にあることを表している。

IV. 考察

1. 性役割タイプによる分類

異性愛男性においては、未分化型が 58 名で最も多く、次いでアンドロジニー 43 名、クロスセックスタイプ型 31 名、セックスタイプ型 29 名となっていた。男性においては、未分化型やアンドロジニーといった、男性性と女性性の両方がともに低いあるいは高い性役割タイプを持つ者が多かった。これは、自分の性別と合致した性役割態度に縛られずに生きている男子大学生が多くいる可能性を示唆している。特に、アンドロジニーは他の性役割タイプよりも LGBT に対して肯定的で積極的な態度

Table 7. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人に対する感情の平均値 (SD)

	同性愛開示	同性友人群		異性友人群		全体	
		前	後	前	後	前	後
信頼・安定感情	アンドロジニー	5.04 (.67)	5.02 (.65)	4.43 (1.15)	4.21 (1.10)	4.74 (.98)	4.62 (.98)
	セックスタイプ型	4.74 (.62)	4.52 (.83)	3.68 (.88)	3.63 (1.08)	4.16 (.93)	4.04 (1.06)
	クロスセックスタイプ型	4.76 (.70)	4.68 (.67)	4.09 (.59)	3.80 (1.05)	4.49 (.73)	4.33 (.93)
	未分化型	3.98 (1.07)	3.83 (1.12)	3.78 (1.02)	3.96 (.66)	3.86 (1.04)	3.91 (.87)
	全体	4.61 (.89)	4.50 (.96)	3.96 (1.02)	3.93 (.95)	4.27 (1.01)	4.20 (.99)
不安・懸念感情	アンドロジニー	2.76 (1.01)	3.11 (1.16)	2.84 (1.29)	2.79 (1.33)	2.80 (1.14)	2.95 (1.24)
	セックスタイプ型	2.84 (1.29)	3.48 (1.20)	2.82 (1.30)	2.91 (1.30)	2.94 (1.18)	3.17 (1.27)
	クロスセックスタイプ型	2.73 (1.39)	3.18 (1.37)	2.80 (.80)	2.87 (.85)	2.76 (1.17)	3.05 (1.18)
	未分化型	3.16 (1.16)	3.60 (1.17)	2.47 (1.00)	2.77 (1.26)	2.74 (1.11)	3.10 (1.28)
	全体	2.94 (1.14)	3.35 (1.21)	2.69 (1.13)	2.82 (1.22)	2.81 (1.13)	3.07 (1.24)

Table 8. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人に対する感情の分散分析

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
信頼・安定感情	開示	.77	1	.77	3.29	.07
	開示×性別	.01	1	.01	.03	.86
	開示×性役割タイプ	.45	3	.15	.64	.59
	開示×性別×性役割タイプ	1.10	3	.37	1.57	.20
	誤差	34.38	147	.23		
	全体	36.71	155			
不安・懸念感情	開示	4.58	1	4.58	8.58	.00**
	開示×性別	1.65	1	1.65	3.09	.08
	開示×性役割タイプ	.58	3	.19	.36	.78
	開示×性別×性役割タイプ	.22	3	.07	.14	.94
	誤差	78.44	147	.53		
	全体	85.47	155			

** p < .01

を持っている (Kasai & Kawakami, 2017) とされているため、多様な性を認める男子大学生が現代には多くいるということになるのかもしれない。

異性愛女性においては、未分化型が53名で最も多く、次いでアンドロジニー42名、セックスタイプ型35名、クロスセックスタイプ型25名となっていた。女性においても未分化型やアンドロジニーが多い印象であるが、男性に比べて性役割タイプ間でのばらつきは大きくない。つまりどの性役割タイプにも同程度の割合の女性が存在するということである。現代社会において、家事や育児で女性らしさを求められる一方、女性の社会進出によって男性と同じように仕事をしたり、自立することが求められる。また、女性らしさや男性らしさを意識せずに過ごす者もいるだろう。このように考えると、女性には様々な生き方や考え方が程度許容される社会になっているように思われる。そのために、女性の在り方も実に多様なのであろう。

2. 異性愛男性

1) 友人との活動の側面における全体の傾向

本研究では、実際の友人から同性愛開示されることを想定した際に、友人関係に関する尺度得点に変化があるのかを検討した。まず、異性愛男性は、同性愛開示前よりも同性愛開示後に共有活動が減少することが示された。今回は女性の友人が同性愛者であった場合でも男性は友人との共有活動が減少することが明らかとなった。友人が同性であれ異性であれ、同性愛そのものに対して拒否的なのであろう。それに対して、相互理解活動において変化は見られなかった。相互理解活動はお互いにごのような人間なのかについて話をするという内容である。友人として、相手に関する話をしたり、自分を知ってもらうことは構わないが、行動を共にすることは避けたいという心理が働くことが考えられる。

2) 友人に対する感情の側面における全体の傾向

異性愛男性において、同性愛開示前よりも同性愛開示後に信頼・安定感情が低下することが示された。中でも男性友人に対して信頼・安定感情が低下していた。友人の性別に関わらず友人が同性愛者であるという事実はショックな出来事となり、親友と思えなくなったり、裏切られたような気持ちを抱くといった不信感を招くことが示唆された。男性友人に対して信頼・安定感情が低下していたことから、同性友人からカミング・アウトされることは自身も恋愛対象に含まれる可能性があることを意味しており、それによって、友人とは気持ちが通じ合っているという気持ちや、友人のことならだいたい知っているという気持ち、友人の考えていることならわかるという気持ちなど、これまでの友人関係の中で構築してきた信頼感が揺らぐ傾向にあるのだろう。

不安・懸念感情も、同性愛開示前より同性愛開示後に増大していた。友人が男性であれ女性であれ、同性愛開示されることは、自分が本当に友人と思われているのか不安になったり、友人の考えていることがわからなくなって不安になったりさせるのだろう。男性が持つ同性愛そのものに対する拒否的な態度が不安・懸念感情を後押ししている可能性もある。

3) 友人への欲求の側面における全体の傾向

同性愛開示前後で親和欲求に変化は見られなかった。友人と一緒にいたい、行動を共にしたいという気持ちが同性愛開示前後で変化しなかったにも関わらず、同性愛開示前後で共有活動が減少したことや、信頼・安定感情の低下、不安・懸念感情の増大は矛盾する結果である。これらの結果が示しているのは、一緒にいたいと思う反面、実際に行動を共にするとなると抵抗感が生じたり、相手からどう思われているかということに自信を持てなくなったりするということだと考えられる。友人関係を続けたいという気持ちは変わらない反面、友人と実際に行動を共にするとなると躊躇してしまったり、自分はこ

Table 9. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人への欲求の平均値 (SD)

	同性愛開示	同性友人群		異性友人群		全体	
		前	後	前	後	前	後
親和欲求	アンドロジニー	5.12 (.82)	5.02 (.89)	4.19 (1.09)	4.05 (.99)	4.66 (1.06)	4.54 (1.05)
	セックスタイプ型	4.91 (1.09)	4.69 (.75)	3.84 (1.17)	3.92 (1.26)	4.33 (1.16)	4.27 (1.11)
	クロスセックスタイプ型	4.83 (1.01)	5.07 (.82)	4.20 (.67)	4.05 (1.01)	4.58 (.93)	4.66 (1.02)
	未分化型	3.98 (1.19)	4.26 (1.31)	3.73 (1.15)	4.05 (.80)	3.83 (1.16)	4.13 (1.02)
	全体	4.69 (1.07)	4.74 (1.03)	3.93 (1.09)	4.02 (.98)	4.29 (1.14)	4.36 (1.06)

Table10. カミング・アウトされた経験を持たない異性愛女性における友人への欲求の分散分析

	変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
親和欲求	開示	.10	1	.10	.27	.60
	開示×性別	.01	1	.01	.03	.86
	開示×性役割タイプ	2.42	3	.81	2.15	.10
	開示×性別×性役割タイプ	.84	3	.28	.75	.52
	誤差	55.06	147	.38		
	全体	58.43	155			

れまで通りでも相手は自分のことをどう思っているかわからないというような、友人としての葛藤が生じることが推測される。

4) アンドロジニー・セックスタイプ型の異性愛男性の傾向

アンドロジニーの異性愛男性においては、同性愛開示後に不安・懸念感情が増大していた。これはセックスタイプ型の異性愛男性にも見られた結果である。このことから、男性性の高さが同性愛開示による不安・懸念感情に影響を及ぼすことが考えられる。女性性の高さに関わらず、高い男性性を持つ男性ほど友人との間に不安や懸念を抱くのであろう。これは、先行研究 (Kasai & Kawakami, 2017) とは異なっていた。友人からの同性愛開示によって生じる不安・懸念感情には、性役割タイプ以外の別の要因が影響している可能性もある。

5) クロスセックスタイプ型の異性愛男性の傾向

クロスセックスタイプ型の異性愛男性は友人との共有活動が減少する傾向にあった。男性性の高さがさらに同性愛友人と行動を共にしたいという気持ちを低下させると思われる。しかし、クロスセックスタイプ型の男性は女性性が高い男性である。これらのことから、性役割態度の偏りが同性愛友人との共有活動に影響を及ぼすということが考えられる。異性愛男性においては、男性性と女性性のどちらが高いかということよりも、どちらかに偏っていることが同性愛友人に対して拒否的な態度を生むのかもしれない。

3. 異性愛女性

1) 友人との活動の側面における全体の傾向

異性愛女性において、男性の友人から同性愛開示された場合には同性愛開示前よりも同性愛開示後に共有活動が増加する傾向にあったことが示された。これには自身が恋愛対象となるか否かが関係しているのだろう。異性として認識していた男性友人が同性愛者であったという事実は、自分が恋愛対象に含まれないということと同時に意味するものであり、そのことによって他の女性友人と同等の付き合いができる男性となることで共有活動が増加するのではないだろうか。おそらく、2人で共にする行動の意味が、異性愛男性の友人と同性愛男性の友人とは異なるのだろう。

2) 友人に対する感情の側面における全体の傾向

異性愛女性においては、同性愛開示前よりも同性愛開示後に信頼・安定感情が低下する傾向にあることが示された。同性愛開示されることは相手が隠してきた秘密を知ることであり、それによってこれまでの友人関係の中で構築してきた信頼の気持ちが揺らぎ、友人とは気持ちが通い合っているという気持ちや友人の考えていることはだいたいわかるという気持ちが疑われることになるのであろう。

不安・懸念感情は、同性愛開示前よりも同性愛開示後に増大すること、特に女性の同性愛友人に対して開示後に増大する傾向にあることが示された。友人が女性であっても男性であっても、また、どのような性役割タイプであっても、友人が同性愛者であることと知ることによって、信頼感の低下とともに、自分が相手にどう思われているのか気になったり、相手の考えていることがわからなくなったりするのだろう。特に女性の同性愛友人に対してこのような感情が強まるのは、自身が恋愛対象となる可能性が生じることによるものであろう。

3) 友人への欲求の側面における全体の傾向

異性愛女性において、同性愛開示前よりも同性愛開示後に親和欲求が増大する傾向にあった。信頼・安定感情は同性愛開示後に低下していたものの、共有活動や相互理解活動、不安・懸念感情は多くの場合同性愛開示前後で変化しない傾向にあった。カミング・アウトされた経験を持つ女性は、同性愛開示されることによってこれまでの友人関係の中で構築してきた友人に対する自分の信頼感を疑うことになるが、友人と一緒にいたい、友人と行動を共にしたいといった友人関係を続けようとする気持ちに変わりはないということだろう。

4) セックスタイプ型の異性愛女性の傾向

セックスタイプ型の異性愛女性の相互理解活動においては、女性友人に対して同性愛開示前よりも同性愛開示後に減少することが示された。女性性の高い女性は、女性友人から同性愛開示されることで、お互いの内面や価値観を話し合うことに抵抗が生じるのかもしれない。自身が恋愛対象となるか否かが影響している可能性が考えられる。女性の友人とより深い話をするには、お互いが恋愛対象とならないからこそ成立するものであって、恋愛対象となる可能性が生じてしまうと躊躇することが考えられる。

5) クロスセックスタイプ型の異性愛女性の傾向

セックスタイプ型と同様に、クロスセックスタイプ型の異性愛女性においても親和欲求が増大する傾向にあった。親和欲求が増大した理由については不明であるが、割り当てられた人数の影響によりこの結果が生じたことが考えられる。また、性役割タイプ要因以外の要因が影響していることも考えられる。

6) 未分化型の異性愛女性の傾向

未分化型的女性では同性愛開示前よりも同性愛開示後に共有活動が増加する傾向にあったことが示された。また、異性友人群における相互理解活動も増加することが示された。自身を女性らしくも男性らしくもないと考える未分化型的女性にとって、同性愛友人は自身の性別と合致した「らしさ」に囚われない友人として映り、そのことが親近感を生じさせることで共有活動が増加するのではないだろうか。特に男性友人の場合には女性友人と

は違った新鮮さがあり、恋愛感情を持ち込まない安心した関係になることもあって、さらに相手への関心が強まるのではないだろうか。

未分化型の女性で、同性愛開示前よりも同性愛開示後に親和欲求が増大する傾向にあることが示された。未分化型の女性であっても、友人からの同性愛開示は信頼感を揺さぶられたり不安を喚起させられたりするものであると思われる。しかし、共有活動や相互理解活動が同性愛開示後に増加しているように、自身の持つ性役割タイプによって相手への関心はむしろ大きくなり、「友人と一緒にいたい」「友達と行動を共にしたい」という気持ちが強まることが考えられる。

V. 今後の課題

本研究においては、同性愛開示はあくまで想定であったため、実際にカミング・アウトされた場合の結果としてどこまで一般化できるのかについても限界があると思われる。また、回答者の性指向、カミング・アウトされた経験等で性役割態度を分類していくと人数が少なくなった群もあり、さらに人数を増やして調査する必要もある。

引用・参考文献

- 東清和 (1990). 心理的両性具有 I - BSRI による心理的両性具有の測定 早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編) 39 pp. 25-26
- 東清和 (1991). 心理的両性具有 II - BSRI 日本語版の検討 早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編) 40 pp. 61-71
- 東清和・鈴木淳子 (1991). 性役割態度研究の展望 心理学研究 第 62 卷 第 4 号 pp. 270-276
- Bem, S.L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, pp. 155-162
- Cochran SD, Sullivan JG, Mays VM (2003): Prevalence of mental disorders, psychological distress, and mental health services use among lesbian, gay, and bisexual adults in the United States. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 71, pp. 53-61
- 榎本淳子 (2003). 『青年期の友人関係の発達的变化-友人関係における活動・感情・欲求と適応-』 風間書房
- 日高庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学 18 pp. 264-272
- Hidaka, Y., & Operario, D. (2006). Attempted suicide, psychological health and exposure to harassment among the Japanese homosexual, bisexual or other men questioning their sexual orientation recruited via the internet. *Journal of Epidemiology and Community Health*, 60, pp. 962-967
- 石丸径一郎 (2004). 性的マイノリティにおける自尊心維持-他者からの受容感という視点から- 心理学研究 第 75 卷 第 3 号 pp. 191-198
- 石丸径一郎 (2008). シリーズ・臨床心理学研究の最前線① 同性愛者における他者からの拒絶と受容-ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ- ミネルヴァ書房 pp. 41-60
- 石丸径一郎 (2009). 性的マイノリティの思春期(思春期のこころと性-「故意に自分の健康を害する」症候群)- (思春期の性は変化しているのか) 現代のエスプリ 509 pp. 187-196
- Kasai, M., & Kawakami, A. (2017). How gender-related personalities relate to attitude and knowledge about LGBT and gender identity. Presented at 31st Conference of the European Health Psychology Society in Padova, Italy.
- 梶谷奈生・横山恭子 (2007). 同性愛者の開示/非開示に関する意識-同居するカップルの事例から- 上智大学心理学年報 第 31 卷 pp. 111-118
- 梶谷奈生 (2008). 女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察 心理臨床学研究 第 26 卷 第 5 号 pp. 625-629
- 桐原奈津・坂西友秀 (2003a). セクシャル・マイノリティとカミング・アウト 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学) 52(2) pp. 121-141
- 桐原奈津・坂西友秀 (2003b). セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学) 52(1) pp. 55-80
- Schneider JA, O'Leary A, Jenkins SR (1995). Gender, sexual orientation, and disordered eating. *Psychology & Health*, 10 (2), pp. 113-128
- 植村みゆき (2007). 友人関係 桜井茂男・松井豊(編) 『心理測定尺度集VI』サイエンス社 pp. 191-201
- 上野淳子 (2008). 心理学における性的マイノリティ研究-教育への視座- 四天王寺大学紀要 第 46 号 pp. 73-83
- 和田実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異 社会心理学研究 第 12 卷 第 1 号 pp. 9-19
- 和田実 (2008). 同性愛に対する態度の性差-同性愛についての知識, 同性愛者との接触, およびジェンダー・タイプとの関連- 思春期学 26, pp. 322-334
- 和田実 (2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究 第 81 卷 第 4 号 pp. 356-363
- 山本章加・大蔵雅夫・重本津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要 第 84 号 pp. 85-9